

一般県道大島線改良工事に伴う
駒形遺跡発掘調査報告

氣仙沼市教育委員会

駒形遺跡発掘調査報告

気仙沼市教育委員会

序

本市は、豊かな海と山に恵まれた自然環境にあり、古より伝えられてきた数多くの文化遺産があります。これらの文化財は、私たちの祖先が長い歴史のなかで、知恵と技術をもって創造してきたものであります。文化財を愛護し活用するとともに、永く後世に伝えていくことは、私たち現代に生きるものの重要な義務であり、責任であると考えております。

このたび、宮城県気仙沼土木事務所より「一般県道大島線改良工事」に伴い、駒形遺跡を一部現状変更したい旨、協議書が提出されました。市教育委員会では、数回の現地踏査また宮城県教育庁文化財保護課の御指導を得て、事前に発掘調査を実施することになりました。

駒形遺跡は、気仙沼湾に浮かぶ大島の南端に近いところにある本市では外洋に最も近い位置にある遺跡として知られております。このたびの調査により、当地方の縄文時代の漁業を知ることができるようにいくつかの資料を得たものと思われます。

発掘調査にあたり御指導をいただきました宮城県教育庁文化財保護課、宮城県気仙沼土木事務所、市文化財保護審議会委員の方々をはじめ、猛暑のなか作業に協力いただきました地元の方々、また報告書作成にあたり御指導・御助言をいただきました早稲田大学金子浩昌先生、東北歴史資料館岡村道雄研究員に深く感謝と敬意を表するものであります。

この小書を刊行するにあたり貴重な文化財が末永く愛護・活用されるとともに、本書が多くの方々に活用され、文化財愛護の一助となることを切に念願するものであります。

昭和61年3月

気仙沼市教育委員会

教育長 斎藤米雄

例　　言

- 本書は、宮城県気仙沼市字駒形42の1番地ほかに所在する「駒形遺跡」の発掘調査報告である。
- 本調査は、宮城県気仙沼土木事務所から気仙沼市が委託を受け、気仙沼市教育委員会社会教育課が担当して調査を実施したものである。
- 本書の執筆、編集は気仙沼市教育委員会社会教育課技師鈴木実夫が担当した。
- 自然遺物については、早稲田大学金子浩昌氏、東北歴史資料館岡村道雄氏に御指導をいただいた。
- 本書で使用した5万分の1の地図は、北海道地図株式会社仙台支店が建設省国土地理院の承認を得て複製した「気仙沼全図」を使用した。
- 図版の航空写真は、気仙沼市産業部水産課から借用し、複製使用した。

目　　次

I 調査に至る経過	1
II 位置と自然環境	2
III 周辺の遺跡	3
IV 調査目的と方法	5
V 調査の成果	6
1. A 地区	
(1) 居位及び遺構	6
(2) 出土土器	7
(3) 土製品	11
(4) 石製品	13
(5) 骨角製品	16
2. B 地区	
(1) 居位及び遺構	19
(2) 出土土器	20
(3) 土製品	25
(4) 石製品	27
(5) 骨角・貝製品	29
(6) 自然遺物	31
VI まとめ	32
VII 図版	33

I 調査に至る経過

駒形遺跡は、気仙沼湾に浮かぶ大島南西部の丘陵斜面に立地する貝塚である。獸骨や土器が出土することは古くから知られており、昭和40年には鹿が浦高等学校社会班の「氣仙沼周辺遺跡の概要及び大島磯草貝塚、大浦浦島貝塚発掘調査報告」に縄文時代晩期の遺跡であると記載してある。

昭和59年11月、宮城県気仙沼土木事務所長より「一般県道大島線道路改良工事」を行うにあたり、駒形遺跡の一部が計画地内に含まれるので協議したい旨、市教育委員会に連絡があった。これに対し市教委では、現地で遺跡範囲及び貝塚の分布状況調査を実施した。遺跡は小野寺東氏宅地を中心に、南北70m、東西150mの範囲であり、そのうち小野寺東氏宅地前の畑に貝が多く散布し、また縄文時代後期の土器片も多く採取することができた。工事計画地内は、すでに以前の県道工事の際に掘削されていたが、道路西側の路肩部分幅約3mほどが従来の姿を残し、そこにも縄文土器が多く分布していた。また、工事に伴い納屋一軒が移転されることになり、その移転先についても協議を行った。

工事計画と現地調査の結果を踏まえ、道路拡張部分については現在の県道がバス路線であるが幅が狭く大変危険であり、拡張はやむを得ない状況であること。また、納屋移転については小野寺氏の宅地及び畑全域が遺跡であるが、そのなかでも比較的土器散布の少ないところに移転してもらうことにし、事前に発掘調査することにした。

以上のような経過により、下記の要項で調査を実施した。

1. 遺跡名 駒形遺跡（宮城県遺跡地名表番号59018）
2. 所在地 宮城県気仙沼市字駒形42の1ほか
3. 調査年月日 昭和60年7月10日～7月29日（11日間）
4. 調査対象面積 約400m²
5. 調査主体 気仙沼教育委員会（教育長 斎藤米雄）
6. 調査担当 気仙沼市教育委員会社会教育課文化体育係
課長 佐藤純夫
係長 菊田重徳
主事 熊谷和彦
技師 鈴木寅夫
7. 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課
気仙沼市文化財保護審議会（委員長 三浦百郎）

金子浩昌 岡村道雄 荒木英夫

8. 調査協力 気仙沼土木事務所

小野寺東 佐々木徳朗

9. 調査補助員 小野寺勝子 菅原ヨシ子 小塚友子 小野寺欣子 小野寺米子

小野寺保美 伊東ヤチヨ 小野寺由里 小野寺里香 高橋圭一

田口一之 斎藤敏江 小野寺恵 小野寺元江 小山より子

村上ミエ子 小野寺ふく子 菅原加津子

II 位置と自然環境

駒形遺跡は、宮城県気仙沼市の湾内に浮かぶ大島の南西部駒形地区に所在する、縄文時代後期から晩期にかけて営まれた貝塚を含む遺跡である。

大島は、南北7km、周囲22km、面積8.9km²で戸数1,150戸人口約5,000人の島である。夏を中心に、観光客が多く訪れる観光地である。大島までは気仙沼観光桟橋よりフェリー等船に乗り、約12km25分程で浦の浜港に着く。

大島の地形は、北端に標高235mの亀山があり、南にゆるやかな起伏で低くなっている。この北から南に傾斜する丘陵は馬の背状になっており、その東西には小さな海浜や入江がいくつも形成されている。東側は、十八鳴浜、田中浜、小田の浜のように比較的広い砂浜が続いているのに対し、西側は高井浜のような岩浜になっている。島の周囲は、大前見島、小前見島、唐島、黒崎島をはじめ、多くの小さな島々が散在し風光明媚な景観を呈している。

地質は、亀山から田中浜を結ぶ東側に中世代ジュラ紀の鹿折層、亀山の西半分から田中浜、小田の浜にかけては安山岩や玄武岩などの噴出岩層が見られる。大島の南側要害から龍舞崎にかけての西海岸には中世代の白堊紀の層が見られ、中山、浅根、要害にかけての地区には、粘土、礫、砂などの千岩田層と呼ばれる新生代の地層が分布している。

大島の植相は亀山を中心とする北部と、中山を中心とする南部地域では植物の分布状態が異っている。樹木は、全島で53科148種確認されているが北部地域に多くの種類が分布していることと、タブノキ、シユロ、シロダモ、ヤブツバキなど暖帯林に多い常緑葉樹も見られるのが特徴といえる。

動物相も北部に多く種類が見られる。陸上動物では、国民休暇村から十八鳴浜周辺にマムシが多く棲み、また全島内にはタヌキが多く増えている。海岸地域ではウミネコが多く飛び交っているのが特徴といえる。海棲動物は、外洋に面した東南側と内湾に面した北西側で異なり、外洋部ではヒジキ、ホングワラなどの海草林、エゾアワビ、ウニ、ホヤ、海タナゴ、ウマズラハギなどが多く、内湾部ではアイナメ、メバル、カレイなどが多い。近年、養殖漁業が盛んに

行われ、島周囲の海域のはとんどにワカメ、コンブ、カキ、ノリなどのイカダが余す所なく浮んでいる。

III 周辺の遺跡（第1図）

大島島内には、駒形遺跡をはじめ9ヶ所の遺跡が確認されている。縄文時代の遺跡としては、亀山よりのびる丘陵裾部に磯草貝塚、浦の浜遺跡、葡萄遺跡がある。

磯草貝塚は、亀山西麓浦の浜湾入口の西に突出した台地上に所在している。昭和37年に鼎が浦高等学校によって調査されている。貝層は4層に分かれ、大木1式から大木7式までの土器を包含し、ホタテ、キサゴ、レイシ、シジミ、アサリなどより構成され、とくにキサゴが目立って多かった。第4貝層から大木6式の土器がまとまって、貝と一縷にマグロやタイなどの魚骨も多く出土している。また同遺跡からは縄文時代中期の大木8・9式・晩期末の大洞A式の土器も出土している。

浦の浜遺跡は、亀山の南麓光明寺前の南向き斜面の畠地及び荒地に所在している。かつて、畠を開田した際に多量の土器が出土したと伝えられ、現在は水田に隣接した畠地に縄文時代晚期の遺物を包含している。

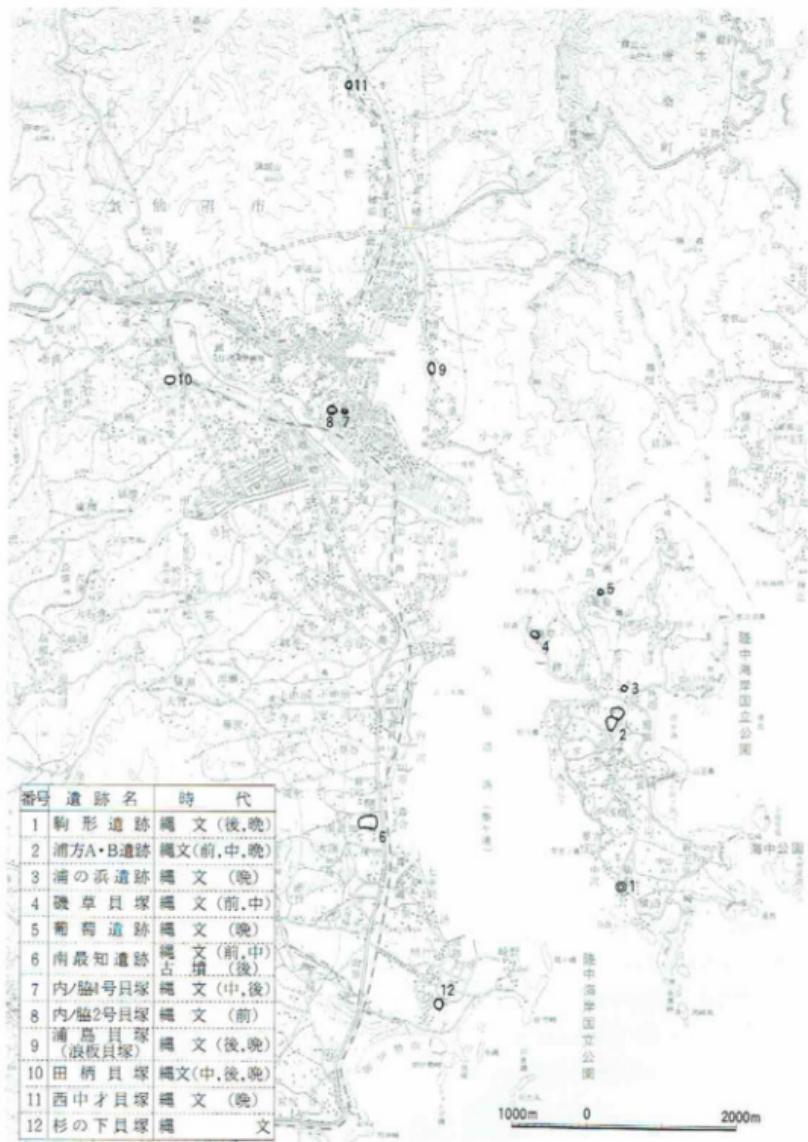
葡萄遺跡は、亀山の北麓の大島瀬戸に面した北斜面に所在し、かつて縄文時代晩期末大洞A式の土器が出土しているが、現在その地は住宅の下になっている。

浦の浜遺跡の南向い標高約30mの丘陵上には、浦方A、B遺跡が隣接して所在している。この2つの遺跡は、東西両側から入いる沢によって分けられ、沢の北側がA遺跡、南側がB遺跡である。A遺跡は東西200m、南北100mの範囲で、南側に2ヶ所、北側に1ヶ所（現在は住宅の下）に貝塚が確認されている。貝塚はハマグリ、アサリを主体とし、獸魚骨や縄文時代中期の土器片を包含している。B遺跡は縄文時代前期の土器片や石器が採集されているにすぎない。この浦方遺跡より約2.5km南に1つだけ離れて駒形遺跡がある。

弥生、古墳、奈良、平安時代の遺跡は島内では確認されていないが、亀山中腹に大島神社があり、ここが延喜式内社の「計仙麻大島神社」であるといわれている。

中世では、大島中学校の西側畠地に高谷館跡が所在する。「大島村風土記御用書出」（安永風土記）によれば、高さ6丈余、東西19間、南北27間で菊田越中が居住した館といわれる。

以上が島内の遺跡の概要であるが、縄文時代は亀山山麓に集中し、しかも比較的波静かな内湾寄りに遺跡が分布している。



第1図 駒形遺跡位置図及び市内貝塚分布図

IV 調査目的・方法（第2図）

すでに述べたように、本調査は駒形遺跡の一部が県道拡張工事地内及びそれに伴う納屋移転地になり、その2ヶ所で事前に発掘調査を実施した。調査対象面積は約400m²であったが、すでに道路工事や宅地造成によって対象地域の半分以上が、けずられていることが数回の現地踏査で確認され、実際の調査は約200m²を対象とした。

県道拡張地内調査区は、県道西側の杉や竹が植えられていた所で、南北に長く設定した。調査は杉の大きな根と竹の根が密集していたので、最初バック・ホーを動かし木の根と表土を除去し、その後に1辺3mのグリッドを南北に10、東西に3、総数24グリッドを設定した。この調査区をA地区とし南から北へA～J、東から西1～3とアルファベットと算用数字の組み合わせでグリッド名を付けた。

納屋移転先の調査区は小野寺氏宅前の畠地になるが、できるだけ土器、貝類等の散布の少ない南端に一辺約5.5mの方形に設定し、それを4分しI～IVグリッドと名付け、この調査区をB地区とした。



第2図 調査区設定図

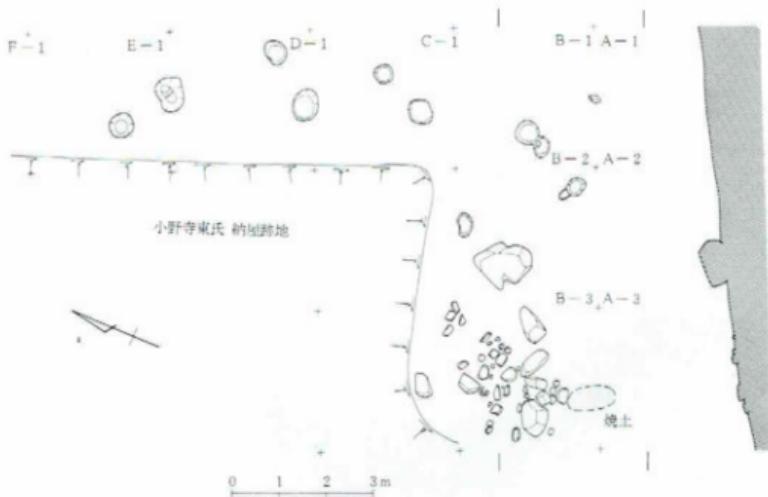
V. 調査の成果

1. A地区

東から西に低くなる丘陵斜面上にある。表面では縄文土器及び貝類、獸魚骨などが散布していた。すでに小野寺氏の納屋を建てた際、その造成断面から遺物包含層の存在を知ることができた。貝層の存在も可能性があったが、A～Bグリッドは竹林になっていたため竹の根によって搅乱を受け、貝層は確認することができなかった。

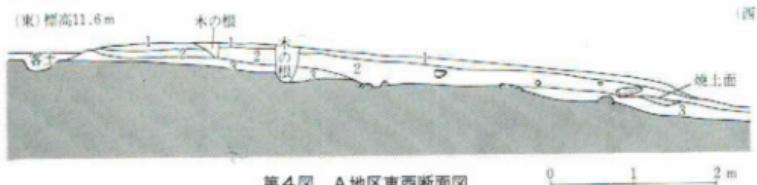
(1) 層位及び遺構 (第3・4図)

第1層(表土)は、暗褐色土で竹の根、木の根で著しく搅乱されている。層中より縄文土器、貝類、獸魚骨、石器などが出土している。以前は、第2層上面に貝層があつたものと思われる。第2層は、暗茶褐色土で小石を多く含むが、しまりがある。A～Dにかけて堆積している。縄文土器を多く包含し骨角器、石器を出土している。第3層は、暗茶褐色土で第2層よりやや暗い色調である。やはり遺物を多く含んでいる。A-3、B-3グリッドで、第3層上面に焼上面が確認された。A-1～D-1に、南北2.5m等間隔に直径約50cm深さ30～60cmのピット4個をはじめ計8個のピットが確認されたが、どれも表土が混入し、壁面も搅乱され木の根による穴と思われる。またB-2、B-3グリッドの地山面に多量の石が確認され、そのうち大き



第3図 A地区平面図

いものでは南北1.2m、東西1.0m、高さ0.5mほどの石もあった。この石は発掘前からも確認できた。



第4图 A地区东西断面图

四

A卷区附件

層號	上色	備考	層號	土色	備考
1	暗褐色土	表土	3	暗茶褐色土	遺物包含層
2	暗茶褐色土	遺物包含層			

(2) 出土兵器

第1層出土土器（第5圖）

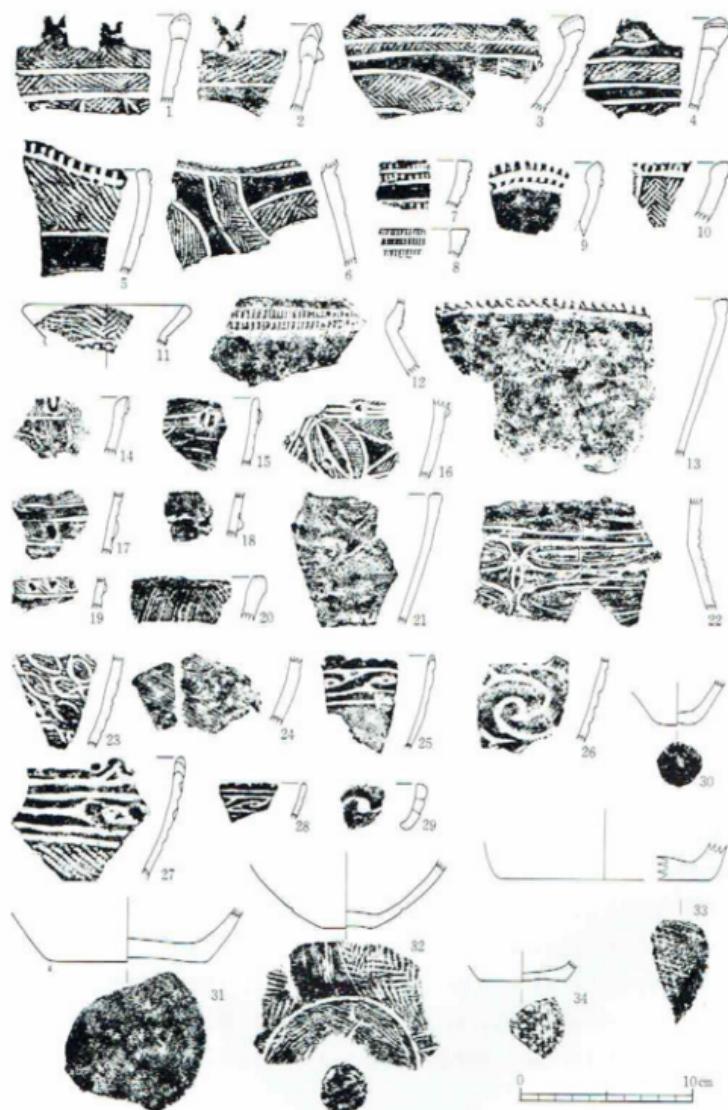
縄文土器が最も多量に出土している。深鉢形土器が大部分で浅鉢形土器、壺形土器、注口土器も出土している。鉢形土器は口縁部が外反し頸部でしまり体部で再び張り出すもの、口縁部が直立ないしは、やや外傾しながら直線的に底部に至るものがある。口縁部が平縁のものと波状口縁のものに分かれ、さらに突起があるものとないものに分かれる。

1～4は平縁で突起がつくものである。1、2は突起の頂部が二分されている。1は突起が2つ1組につき、2は突起付け根に瘤状小突起が貼ってある。磨消繩文が施文されている。3、4は山形突起がつくもので、口縁端が肥厚している。

5、9、10は波状口縁のものである。口縁下に連続刻目をついている。その下は磨削文が施されている。7、8は平縁と思われるもので連続刻目を数段つけてある。11は平縁で大きく外反する小型の鉢形土器で頸部がしまり、そこに連続刻目をめぐらしている。12も深鉢形土器の頸部がしまっているもので、2段の連続刻目をめぐらし、その下は無文である。

14、15は深鉢形土器の平縁で直立するものである。14は口縁部に頂部に切り込みを入れた瘤状突起を貼り、横位沈線と縱位の櫛目状沈線で施文している。15は横位及び孤状沈線で文様を施文し、頂部に切り込みを入れた瘤状小突起を貼っている。16は横位及び孤状沈線で磨消繩文帯をつくり瘤状小突起を貼っている。17は横位及び斜位沈線で施文し瘤状小突起を、18は横位沈線と縱位櫛目状沈線で施文し瘤状小突起を貼っている。19は磨消繩文の繩文帯に瘤状小突起をめぐらしている。

20、21、24は柳口状沈線だけのものである。20、21は深鉢形土器の平線で、口縁が直立している。22は鉢形土器で頸部がしまっている。孤線連結文が描かれている。23は網文施文後にくぼみ



第5図 A地区出土土器(第1層)

さり状の孤線連結文が描かれている。

25～29は晩期初頭の土器である。25、28は口縁が直立する鉢形土器で、口縁頂部に連続刻目を入れ、文様は入組文である。26、27は三叉状文がみられる。27は口縁が直立する口縁頂部に彫刻的な連続刻目を入れ、横位沈線間に魚眼状三叉文が描かれている。29は口縁部破片で、沈線の連結部に孔をあけている。

30～34は底部資料である。平底と揚底のものがある。30、32は丸底風であり、やや揚底になっている。31、34はやや揚底で、34には綱代痕がみとめられる。33は平底で直交する沈線の調整痕がみとめられる。

第1層出土土器は、その特徴から縄文時代後期中葉から晩期初頭にかけてのもので、出土量は後期後葉のものが多い。

第2層出土土器（第6図）

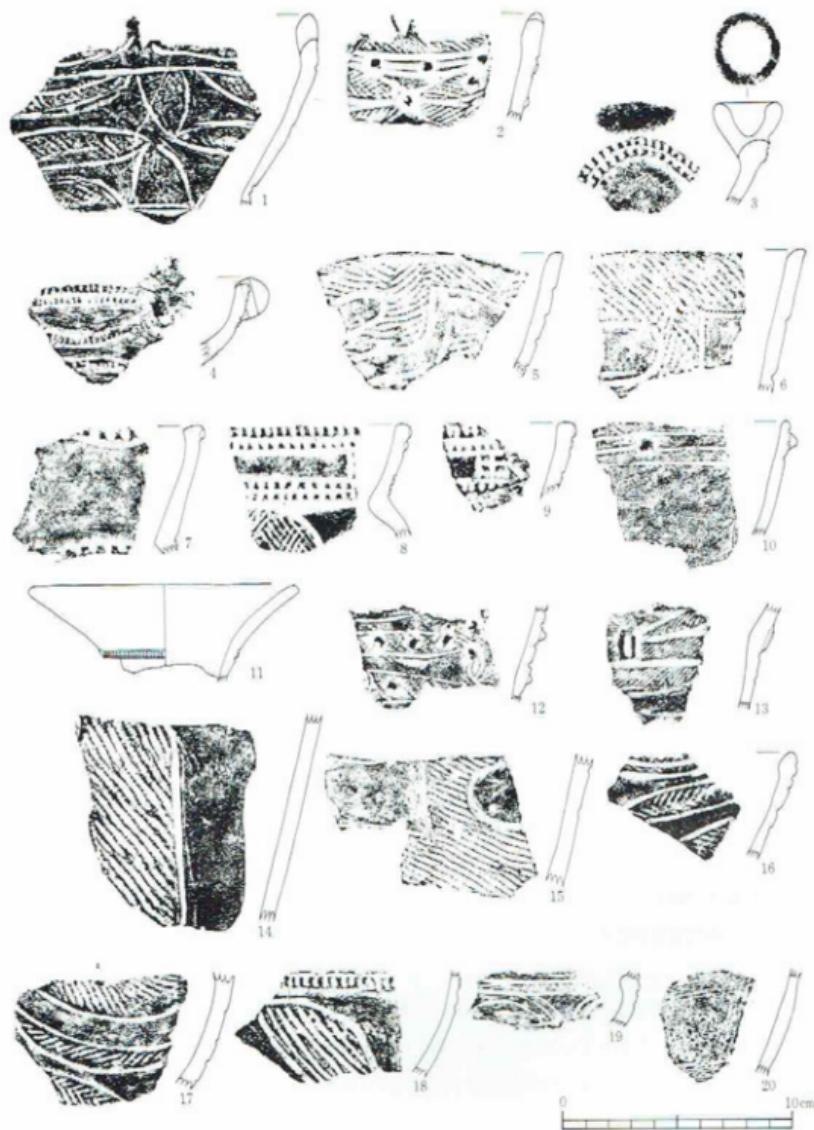
深鉢形土器、浅鉢形上器、壺形土器が出土し注口土器も若干含まれる。出土量は比較的多い。口縁部資料では平縁のものと波状口縁のもの、また突起がつくものとつかないもの、口縁部が外反し頭部でしり、さらに体部がふくらむものと、口縁部が直立及びやや外反し直線的に底部に至るものと分けられる。文様では磨消繩文が多い。

1～4は口縁部に突起がつくものである。1は平縁の深鉢形土器で頂部が2分された突起がついている。磨消繩文による入組文が描かれている。2は波状口縁の深鉢形土器で、口縁部頂部に切り込みを入れた小突起と大突起がつくもので、小突起と大突起の組み合わせについては小破片なので推測できない。文様は磨消繩文による孤線連結文で、沈線上及び文様連結部に瘤状小突起が貼ってある。3は大波状口縁で波状頂部にラッパ状の大突起がつき、口縁部に2段の連続刻目がある。その下は無文である。4は平縁の浅鉢形土器で小型である。口縁外側に4ヶ所、縦に孔をあけた球状突起をつけている。口縁部及び体部には、ヘラ状工具先端でつけたと思われる細身の連続刻目を横位及び孤状に施文している。

5、6は外傾する平縁の深鉢形土器で、曲線及び直線による磨消繩文を施文している。7は波状口縁で口縁部及び縁部に連続刻目がめぐっている。8、9は平縁のもので口縁部及び頭部に2段の連続刻目がめぐっている。11は平縁の浅鉢形土器で、頭部だけに連続刻目がめぐるものである。

10、12、13は瘤状小突起を貼っているものである。10は直立する平縁の深鉢形土器で横位沈線上に瘤状小突起を貼っている。12は磨消繩文による入組文を施文し、縄文帶に瘤状小突起をめぐらしている。13は横位及び斜位沈線で磨消繩文を施文し、その連結部に頂部に切り込みを入れた瘤状突起を貼っている。

14～17は磨消繩文のものである。16は波状口縁で、平行沈線及び孤線で磨消繩文を施文して



第6図 A地区出土土器(第2層)

いる。17は壺形土器の体部下半の破片で、横位及び弧状の沈線で磨消縄文を施文している。18は頭部破片で連続刻目をめぐらし孤状沈線によって文様を施文し、その中を数条の沈線でうめている。19は頭部破片で横位及び弧状の平行沈線で文様を施文している。20は櫛目状沈線のものである。

第2層出土土器は、器形及び文様の特徴から縄文時代後期中葉から後葉のものと思われる。

第3層出土土器（第7図）

深鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器が出土しているが少量である。

1は波状口縁の注口土器で注口部だけ欠損している。波状口縁は4分され大波状部を2ヶ所、小波部を2ヶ所にそれぞれ対象に配置し、どちらの頂部にも切り込みを入れている。頭部及び体部には磨消縄文による孤線連結文が施文され、文様連結部に頂部に切り込みを入れた瘤状突起を貼っている。文様は波状口縁頂部と瘤状突起が縦にはば一直線に並び、そのラインを基点に4分割されている。底部は丸底風であるが揚底になっている。

2は平縁の浅鉢形土器で、口縁部に小突起がつき、連続刻目を口縁部の内と外両側に2段めぐらしている。孤線による磨消縄文が施文されている。

3、4は平縁のもので口縁部に連続刻目がめぐらしている。

5～9は体部破片で沈線による磨消縄文のものである。9は下部縄文帯に斜位沈線が描かれている。

10は平縁の深鉢形土器で口縁部が直立している。縄文だけのものである。

11、12は頭部がしまるもので斜位沈線が施文されている。

13は櫛目状沈線のものである。

(3) 土製品（第8図）

この地区からは、土偶、環状耳飾、円板状土製品、耳栓状土製品、スタンプ状土製品などが出土している。

土偶 1点出土している。

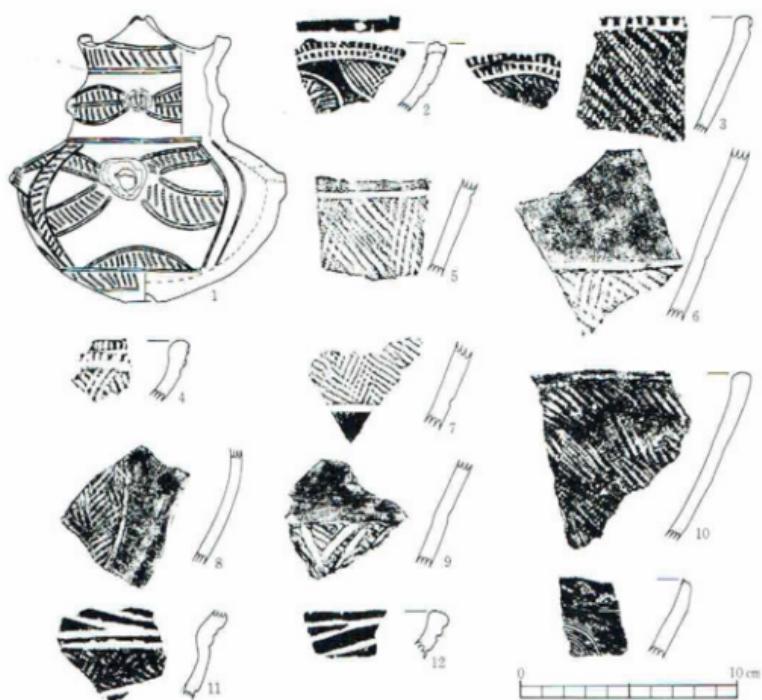
脚部破片である。残存部の高さは3.6cm、幅2.6cmを計測する。脚裾は丸く広く、底は平らである。文様はL R 縄文だけである。

環状耳飾 2点出土している。

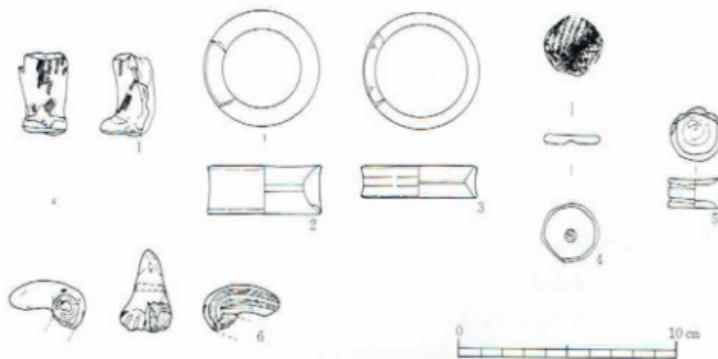
どちらも破片であるが、その残存部より2は直径5.1cm、3は直径5.3cmと推定される。2点とも無文である。断面は三日月状をしている。

円板状土製品 1点出土している。

上器体部破片を素材にし、周縁に敲打や研磨を加え円形にしている。表面は縄文、裏面には凹みがつくられている。直径2.7cm、厚さ0.5cmを計測する。



第7図 A地区出土土器(第2層)



第8図 A地区出土土製品

A地区出土土製品

番号	種別	出土層位	大きさcm	番号	種別	出土層位	大きさcm	番号	種別	出土層位	大きさcm
1	土偶	B・3-3	(3.6)	3	環状耳飾	B・2-2	5.3	5	耳栓状土製品	表探	2.4
2	環状耳飾	表探	5.1	4	円板状土製品	表探	2.7	6	スタンプ状土製品	B・3-2	4.5

耳栓状土製品 1点出土している。

平面形は円形である。直径2.4cm、高さ1.4cmを計測する。上と下に凹みをもち、周縁部に2本の沈線を入れている。器面はかなり風化しているが、朱色の塗料が部分的に残存している。

スタンプ状土製品 1点出土している。

つまみ部は上端にかけ細くなり、孔をあけている。下部は二股に分かれ、底には深い溝で文様を入れている。垂飾品と思われる。高さは3.8cm、最大幅は3.5cmを計測する。

(4) 石製品 (第9・10図)

量的には多くないが、石鎌、石匙、石錐、磨製石斧、石籠、石棒、石核、剥片等が出土している。また、楕円形の礫が多量に出土している。

石鎌 3点出土している。

1は基部が平基のもので、尖頭部両側縁がややふくらんでいる。石材は鉄石英である。2は基部に比較的深いえぐりを入れたもので、尖頭部先端をわずかに欠損している。3は基部が丸味をもって突き出ているが、茎の作り出しがみられないものである。2、3の石材はチャートである。

石匙 2点出土している。

4は横型石匙である。両側全面に二次加工している。5は縱型石匙である。刃部は片面加工で、約半分が欠損している。石材はチャートである。

石錐 2点出土している。

どちらも基部を有するが、6は基部がふくらみをもち、錐部にゆるやかな角度で移行している。錐部先端側縁が使用によって摩耗している。7はT字型をし、やはり錐部側縁が摩耗している。

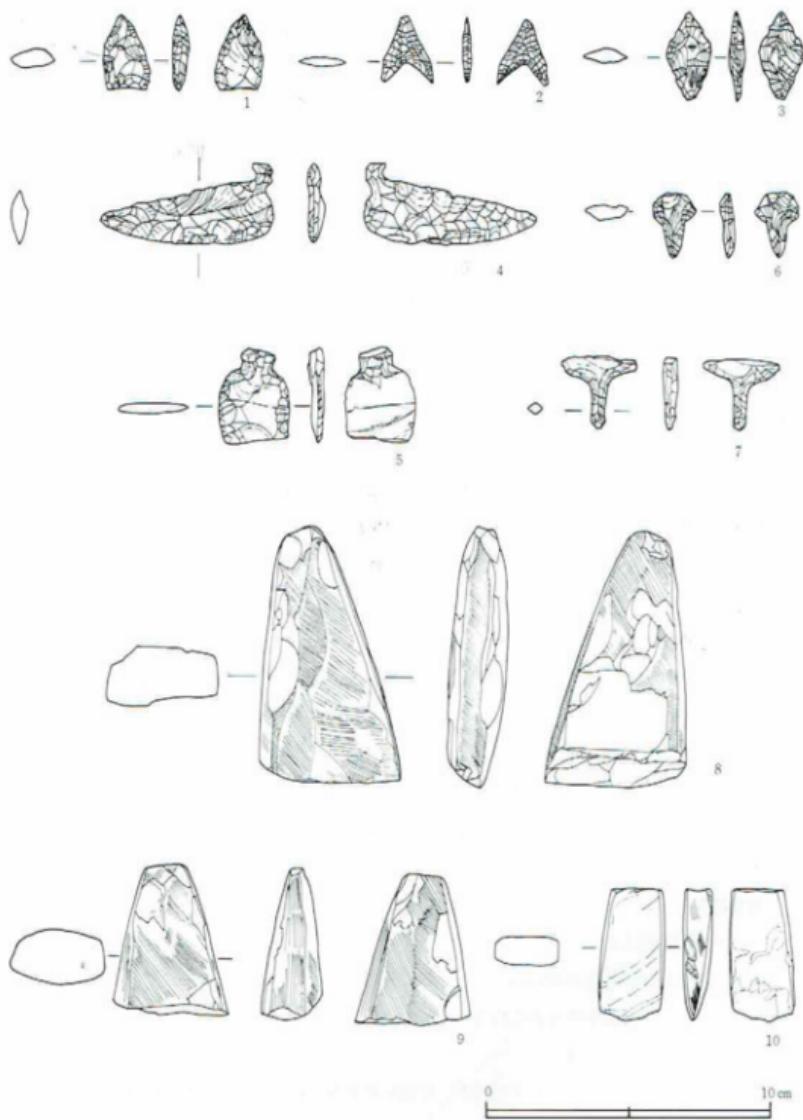
磨製石斧 3点出土している。

8、9は刃部を欠損している。斧頭部の幅が狭く、刃部の幅が広くなるものと思われる。全面研磨されている。10は小型の石斧で、刃部が一部欠損している。両側面は研磨されているが他の器面は研磨の痕跡がみとめられない。

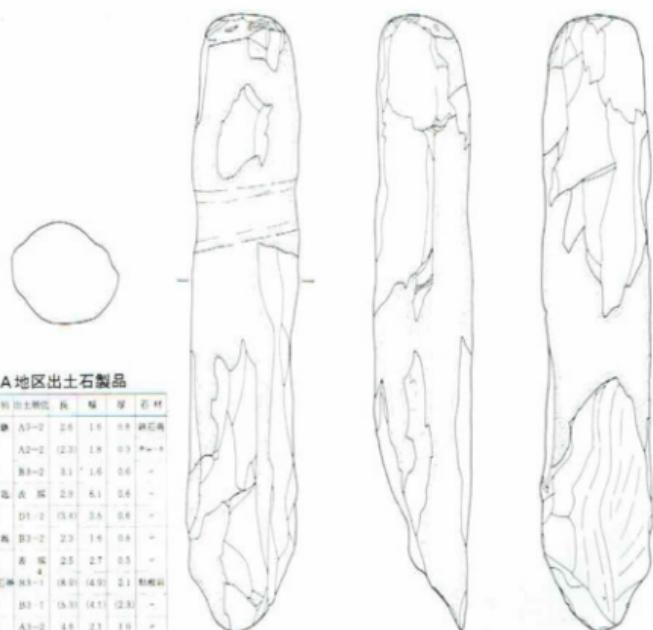
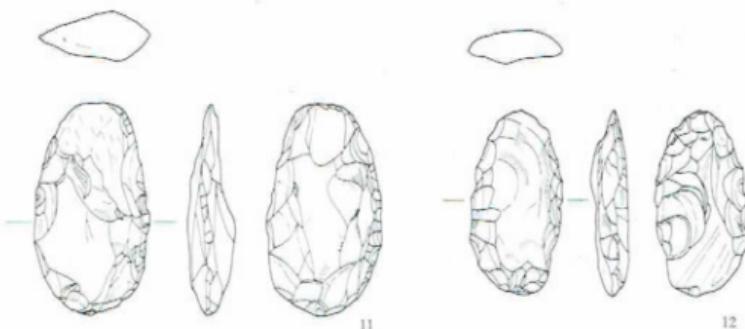
石籠 2点出土している。

11、12とも粗い両面加工をしているが、片面に自然面を残している。上辺が狭く、下辺が若干広くなる縦長の楕円形をしている。

石棒 1点出土している。



第9図 A地区出土石製品1



序号	标本	出土地点	长	宽	厚	石材
1	石 钺	A3-2	2.8	1.6	0.5	砾石质
2	"	A2-2	(2.2)	1.8	0.5	"
3	"	B3-2	3.1	1.6	0.6	"
4	石 镰	石 锤	2.9	6.1	0.6	"
5	"	D1-2	(3.0)	2.6	0.6	"
6	石 镰	B3-2	2.3	1.6	0.8	"
7	"	石 锤	2.5	2.7	0.5	"
8	磨制石斧	B3-1	(8.0)	(4.9)	2.1	砾石质
9	"	B3-1	(5.0)	(4.1)	(2.3)	"
10	"	A3-2	4.6	2.3	1.0	"
11	石 镰	B3-2	9.3	5.1	2.1	"
12	"	B3-2	8.1	4.2	1.7	砾石质
13	石 钺	B3-2	27.0	4.8	4.2	砾石质

0 10 cm

第10图 A地区出土石制品2

13は大型のものである。頭部部分で先端部を欠損している。表面には敲打痕がみとめられ、握部と思われる凹部分がある。断面は円形である。

このほか石棒の破片、石劍・石籠の未製品が数点出土している。

(5) 骨角製品 (第11・12図)

この地区からは、根ばさみ、燕尾型離頭鎌、骨籠、尖頭器、弯曲刺具などが出土している。このうち骨籠の出土量が最も多い。

根ばさみ 1点出土している。

鹿角製で、先端部に石鎌着装のためV字状の抉りが入れられ、先端より約1cmまでアスファルト状物質の付着がみとめられる。茎部が欠損している。

燕尾型離頭鎌 2点出土している。

どちらも鹿角製である。2は先端部と尾部を欠損している。全体的に細身である。器体中央部に引綱を止めるための孔が穿たれ、柄をさしこむ穴がある。3は先端部破片で比較的大きいものである。先端は丸味をおび、するどくない。断面は梢円状である。

骨籠 7点出土している。

シカの中足骨を素材としている。完形品のもので最大長は10~15cmを計測する。小型のものは比較的よく調整されているのに対し、大型のものは粗い調整である。

尖頭器 3点出土している。

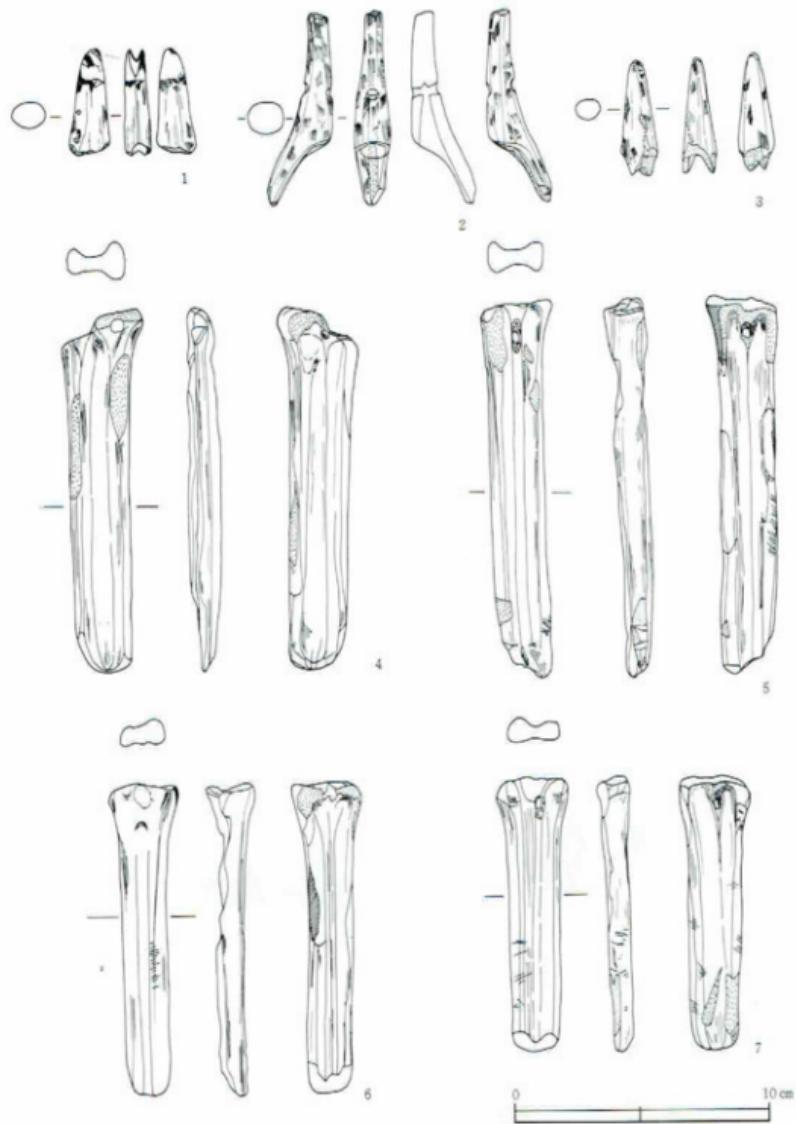
シカの中手、中足骨を素材としている。縦長の器体先端に調整を加え鋭利にしている。最大長は8~11cmを計測する。

弯曲刺具 1点出土している。

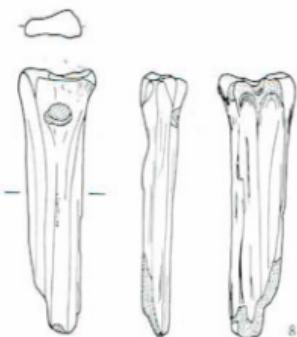
イノシシの下顎けん骨を素材としている。器体中央部に横位調整擦痕がみとめられ、一段低くなっている。この部分を柄に結んで使用したものと思われる。

A地区出土骨角製品

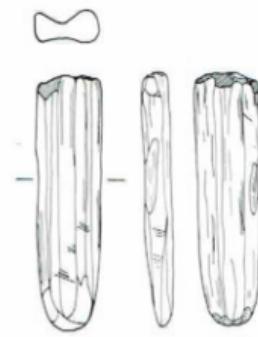
番号	種別	出土層位	最大長cm	素材
1	根ばさみ	B1-2	(4.6)	鹿角
2	燕尾形離頭鎌	表 案	(8.1)	"
3	"	B2-2	(4.5)	
4	骨籠	B3-2	14.2	シカの中足骨 後
5	"	B2-2	14.7	"
6	"	C2-2	12.1	前
7	"	C3-2	10.7	後
8	"	B3-2	(9.3)	前
9	"	B3-2	(8.9)	後
10	"	B1-2	(10.6)	"
11	尖頭器	B3-2	8.5	"
12	"	B3-2	9.7	シカの中手骨
13	"	B3-2	7.9	"
14	弯曲刺具	B1-2	11.1	イノシシの左側顎けん骨



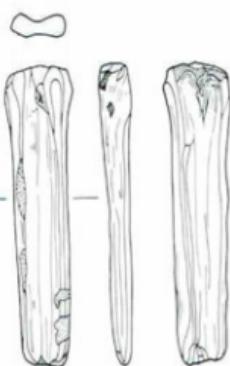
第11図 A地区出土骨角製品1



8



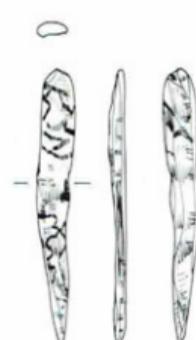
9



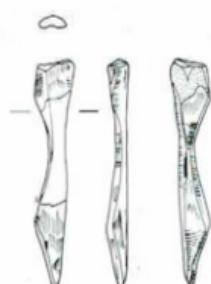
10



11



12



13



14

第12図 A地区出土骨角製品2

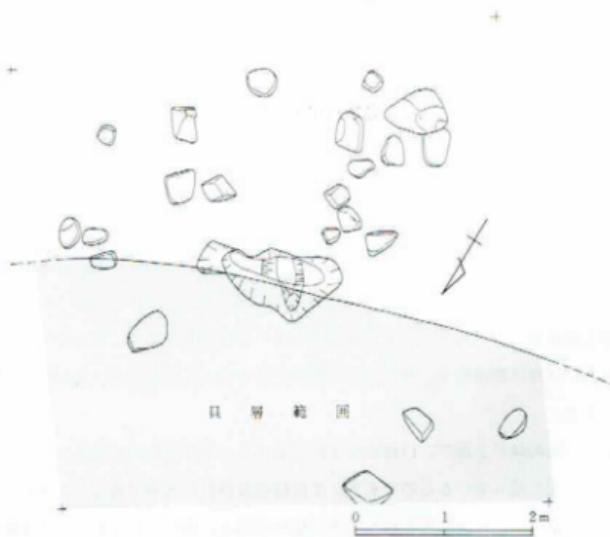
2. B地区

A地区の西約10mはなれた東から西に緩やかに低くなる畠地内に設定した。調査区は、一辺約5.5mにしたが、都合により東辺だけ5.0mになり、歪んだ方形になった。この調査区を北西隅をI、北東隅をII、南東隅をIII、南西隅をIVグリッドと名付け、調査を実施した。畠地であるが、表面に黄色粘土が敷かれてある所もあり、相当手が加えられているように思われた。

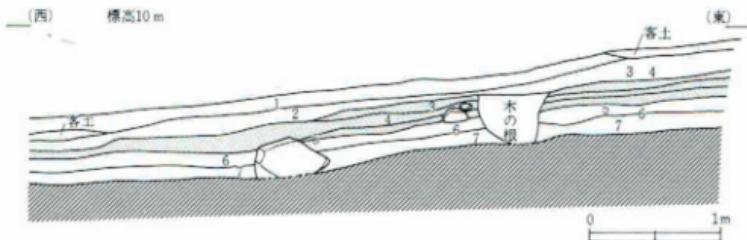
(1) 層位及び遺構 (第13・14図)

第1層(表土)は、暗褐色土で5~10cmの厚さがある。部分的に黄色粘土が表土上に、また暗黄褐色粘土が表土下に客土してある。繩文土器が多量に出土し、なかには第3層(第1貝層)出土のものと接合するものもある。第2層(旧耕作土)は、黒褐色土で10~20cmの厚さがある。繩文土器、貝類などを出土しているが、現代のものも含んでいる。

第3層から5層までは貝層がみとめられた。第3層(第1貝層)は、黒色の混土貝層である。上部は一部削平されているものと思われる。4~6cmの厚さで、マガキ、レイシが主体でアサリも含まれる。第4層(第2貝層)は、暗茶褐色の混貝土層で3~15cmの厚さがあり、層の厚さは一定ではない。この層はアサリが主体で、レイシ、マガキ、アズマニシキが含まれる。繩文土器は3貝層中最も多く出土している。第5層(第3貝層)は、黒色の混土貝層で3~4cmの厚さがある。アズマニシキが主体で、密度が濃く包含されている。Iグリッドの途中で消え



第13図 B地区平面図



第14図 B地区断面図

B地区層位

層No	土色	備考	層No	土色	備考
1	暗褐色土		5	黒色土	混土貝層アズマニシキ主体
2	黒褐色土	表土 旧耕作土	6	黒色土	
3	黒色土	混土貝層マカキ主体	7	褐色土	
4	暗茶褐色土	混目土層アサリ主体			

ている。縄文土器の出土量は少ない。

第6層は、黒色土で5~10cmの厚さがある。I~IVグリッド全域に広がっているが、遺物は若干しか含まれていない。第7層は、褐色土で10~15cmの厚さで、遺物は含んでいない。そして地山の黄褐色の粘土層になっている。

貝層の範囲はI・IIグリッドが中心で、III・IVグリッドでは北端で消え調査区外の東・西・北にのびている。本調査区は、貝塚の南端の一部を確認することになった。遺構かどうか不明であるが、地山面に深さ約30cmを計る不整形の落ちこみが確認された。覆土は第7層だけである。

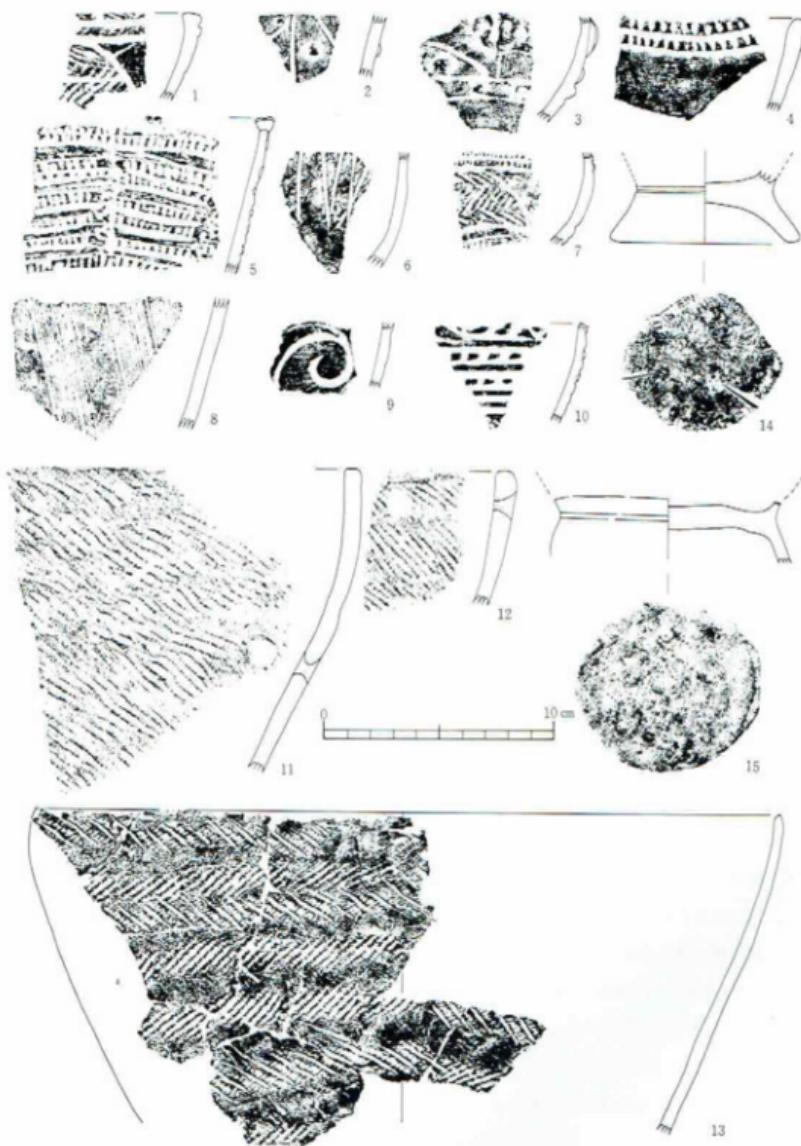
(2) 出土土器

第1、2層出土土器 (第15図)

第1層から1、4、6、7、9、11、13、第2層から2、3、5、8、10、12、14、15が出土しているが、両層も攢乱されているのであわせて述べる。

深鉢形土器が多い。口縁部資料では平縁のもの、波状口縁のもの、また小突起をつけているものもある。文様は磨消縄文、連続刻目、瘤状突起が貼ってあるもの、柳目状沈線、縄文だけのものがある。

1は波状口縁の鉢形土器で、口縁部に平行沈線、その下に磨消縄文が施文されている。2、3は瘤状小突起を貼っているものである。2は縦位及び斜位沈線で施文し、瘤状小突起を貼っている。3は頂部に切り込みを入れた大きい瘤状突起と、横位平行沈線と孤状沈線の組み合せによって施文した文様帶に瘤状小突起を貼っている。文様帶には柳目状沈線を入れている。



第15図 B地区出土土器(第1・2層)

4は波状口縁の深鉢形土器で口縁部に連続刻目を2段めぐらし、その下は無文である。

5は平縁の深鉢形土器で、口縁部に小突起がつくものである。文様は連続刻目による入組文である。6は深鉢形土器の体部下半の破片で、縦位の沈線だけ施文している。7は頭部から口縁部にかけての破片で、口縁と頭部に連続刻目をめぐらし、その間は磨消繩文を施文している。8は縦位の櫛目状沈線だけ施文している。

9、10は晩期の土器である。9は磨消繩文による入組文と思われる。10は口縁部に彫刻的な刻目を、その下は平行沈線間に間隔をあけて連続刻目を入れている。11～13は平縁の深鉢形土器で繩文だけのものである。14、15は高台付き土器底部資料である。

第3層（第1貝層）出土土器（第16図）

深鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器が出土しているが、大部分は深鉢形土器である。口縁部資料は、口縁部が外傾し頭部でしまるものと口縁部が直立かやや外傾し屈曲せずに底部に至るものがある。また波状のものと平縁のものに分かれるが、平縁のものが多い。さらに口縁部に突起がつくものとつかないものに分かれる。

1～3は、磨消繩文を伴なうものである。1、2は平縁の深鉢形土器である。3は体部破片で、横位沈線によって繩文帯をつくり、縦位の弧状線で連結している。

4は壺形土器の口縁で、口縁部に数個の小突起をついている。口縁下は無文で、裏面に輪積みの痕がみとめられる。5～7は、波状口縁で、連続刻目をめぐらしているものである。5は口縁部と頭部に刻目をもち、その間の繩文帯に斜位沈線を施文している。

8は平縁の深鉢形土器で、横位沈線によって磨消繩文帯をつくり、口縁部と繩文帯に瘤状小突起をめぐらしている。

9、10は沈線だけのもので、櫛目状のもの、二本一組の斜位沈線のものがある。11、12は繩文だけのもので、口縁部から底部にかけ屈曲せずに至る深鉢形土器である。

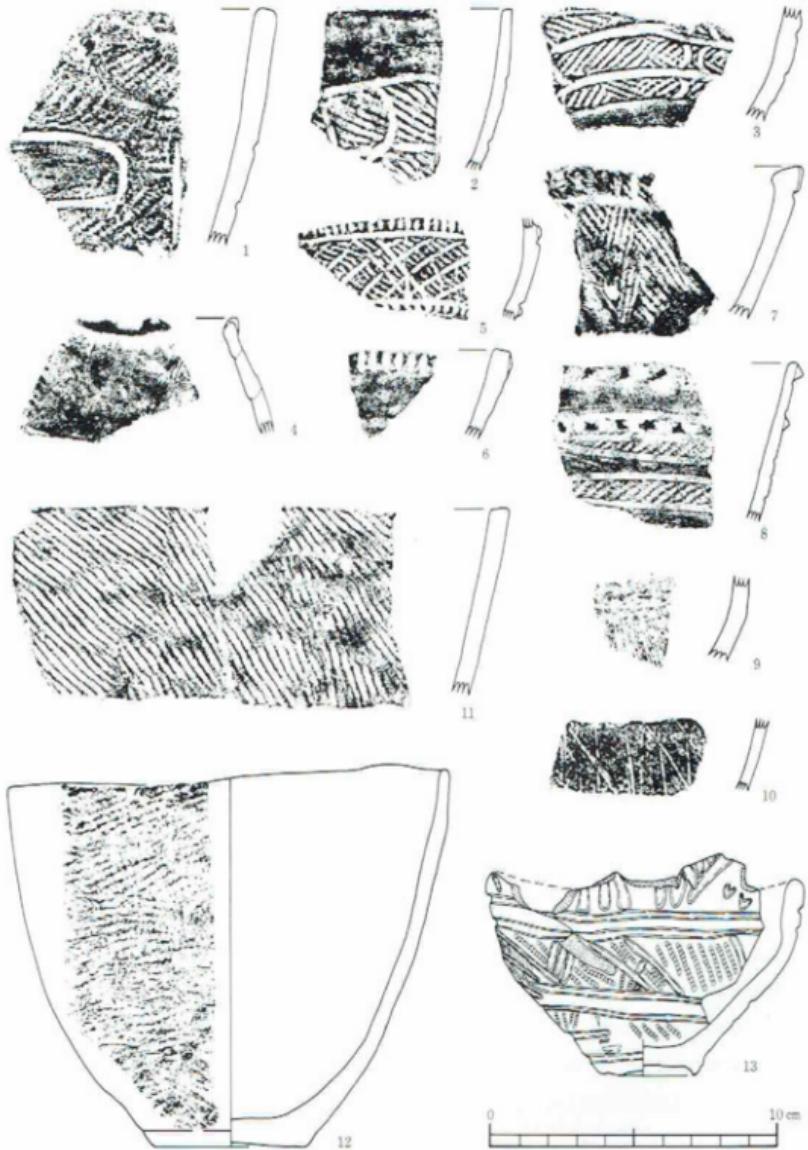
13は浅鉢形土器で、口縁が直立している。口縁部に突起を数個つけ、縦長の刻目をいれてい。体部には横位平行沈線を3段に、その上部平行沈線間は2本1組の斜位沈線で連結している。地文はR L繩文である。これらの土器は、繩文時代後期後葉のものと思われる。

第4層（第2貝層）出土土器（第17図）

この地区では、この層から最も多くの土器片が出土している。深鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器などが出土しているが、大部分は深鉢形土器である。

1～6は波状口縁の深鉢形土器で、口縁部に連続刻目をめぐらすものである。1～4は口縁下は無文である。波状口縁の頂部に切り込みを入れている（4）もある。5～6は曲線及び弧状沈線によって磨消繩文を施文している。

7は平縁の深鉢形土器で、口縁部に連続刻目をめぐらし、その下は横位沈線を施文している。



第16図 B地区出土土器(第3層(第1貝層))

8は小型の浅鉢形土器の体部破片で、頭部に連続刻目をめぐらし、その下は磨消繩文による入組文が描かれている。9は深鉢形土器の頭部破片で、刻目をめぐらし、その上半は無文、下半はR L繩文である。

10 11は浅鉢形土器体部破片で、同一個体である。頭部上半は斜位及び横位沈線で文様をつくり、そのなかを櫛目状沈線を入れている。文様帶に瘤状小突起をめぐらし、数ヶ所に頂部に切り込みをいれた大きい瘤状突起を貼っている。下半は横位沈線で同文様帶をつくり、櫛目状沈線帶及び横位沈線上に瘤状小突起を数多く貼っている。12~13は横位沈線で磨消繩文をつくり、瘤状突起をめぐらしている。

14、15、24は平縁の深鉢形土器で、体部に磨消繩文が施文されている。15と24は同一個体と思われる。

16は隆線に連続刻目をいれ、隆線の終結部に瘤状小突起を貼っている。17~19は沈線文系の土器である。17は孤線連続文、18は格子状沈線、19は不規則な横位沈線のものである。20は平縁の深鉢形土器で、横位羽状繩文が施されている。

22~24は底部資料である。平底のものと揚底のものがある。22は木葉痕、23は沈線調整、24は綱代痕がみとめられる。

以上の第4層出土土器は、波状口縁の深鉢形土器で、口縁部及び頭部に連続刻目があるものが磨消繩文を伴うものが多く、また浅鉢形土器に瘤状小突起を貼っているものもある。これらの土器の特徴より、この層は繩文時代後期中葉から後葉にかけて堆積したものと思われる。

第5層（第3具層）出土土器 （第18図）

この層からは少量の土器片しか出土していない。

1、2は磨消繩文をもつものである。1は頭部上半の破片で、2は体部破片である。

3~6は連続刻目をもつものである。3は平縁の深鉢形土器で、口縁部に連続刻目をめぐらし、その上に小突起がつき、沈線による入組文を施文している。4は浅鉢形土器体部破片で、頭部に連続刻目を入れている。5は平縁の鉢形土器で、口縁部と横位沈線間に連続刻目をめぐらしている。6は口縁内側が肥厚し、外側に2段の連続刻目を入れている。

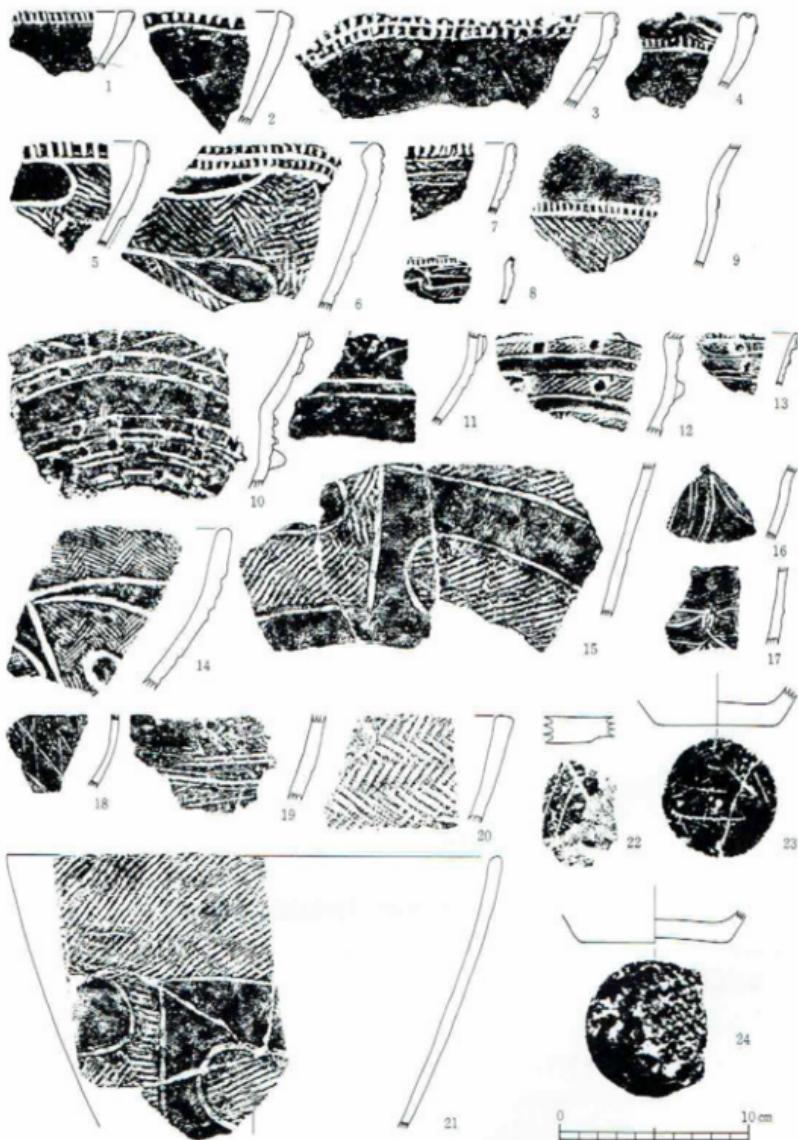
7は小型の浅鉢形土器の破片で横位沈線がみとめられる。

第6層出土土器 （第19図）

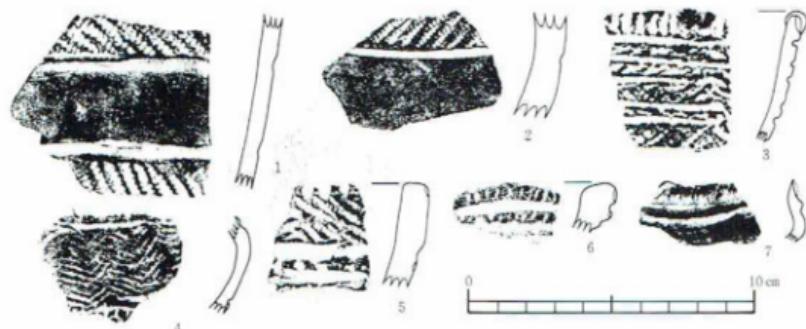
この層も、ほんの少量の土器片しか出土していない。

1は平縁の深鉢形土器で繩文だけ施文している。

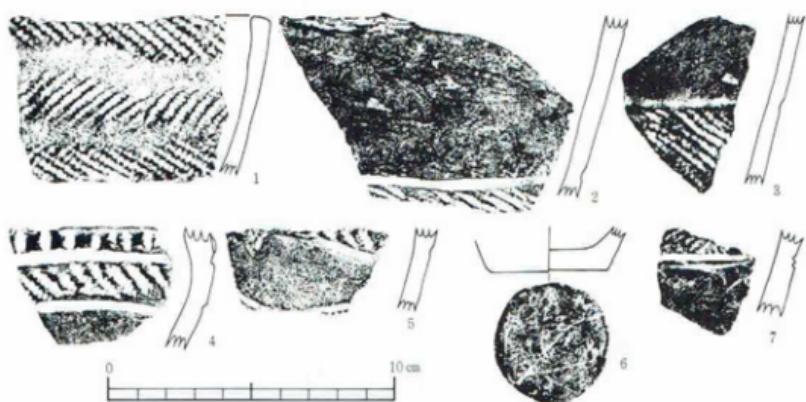
2~5、7は磨消繩文のものである。2は口縁部が外反している。4は頭部から体部の破片で、頭部がしまっており連続刻目をめぐらしている。体部はふくらみ、横位沈線による磨消繩文である。6は底部資料である。平底で木葉痕がみとめられる。



第17図 B地区出土土器(第4層(第2貝層))



第18図 A地区出土土器(第5層(第3貝層))



第19図 第6層出土土器

(3) 土製品 (第20図)

この地区からは、環状耳飾4点、円板状土製品、土製垂飾品各1点の6点が出土している。このうち貝層中からは2点だけ出土しているのにすぎない。

環状耳飾 4点出土している。

4点とも完全なものではなく破片であるが、残存部から直径6.0～6.5cmと推定される。A地区出土より直径で約1cmも大きい。厚さは細身のもので1.4cm、太身のもので1.8cmを計測し、断面は三日月状のもの、三角形に近いものがある。

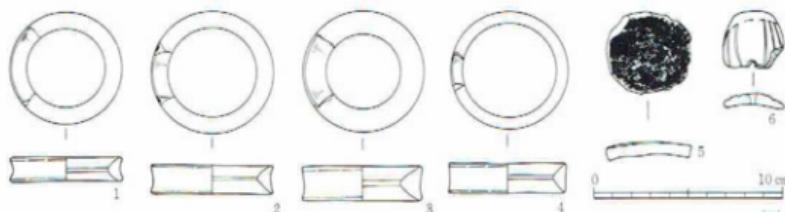
円板状土製品 1点出土している。

深鉢形土器の内湾する口縁部破片を素材とし、周縁に敲打を加え円形に整形している。表面

は無文である。直径4.5 cm、厚さ0.7 cmを計測する。

土製垂飾品 1点出土している。

約半分を欠損しているが、残存部より平面形は橢円形を呈するものと推定される。中央に両側より孔があけられ、その両側に3本づつ細い溝を入れられている。裏は孔の両側に2ヶ所の凹みをもつものと思われる。残存部の最大長は3.0 cm、幅2.9 cmを計測する。



第20図 B地区出土土製品

B地区出土土製品

番号	種別	出土層位	大きさ(cm)
1	環状耳飾	I - 4	6.0
2	"	II - 2	6.5
3	"	III - 2	6.4
4	"	I - 2	6.2
5	円板状土製品	I - 4	4.3
6	上製垂飾品	III - 1	(3.0)

(4) 石製品 (第21図)

出土は少量である。石鏃、磨製石斧、不定形石器、石棒が出土しているだけである。

石鏃 1点出土している。

基部が丸味をもって突出しているが、茎の作り出しがみられないもので、尖頭部両側縁が直線的である。石材はチャートである。

磨製石斧 2点出土している。

3は斧頭部を欠損している。刃部は扁平で、刃部にかけて幅が広くなるものと思われる。全面斜位に研磨されている。刃部先端に使用痕がみとめられる。4は小型である。刃部は扁平で斧頭部が狭く、刃部の幅が広いものである。器面は斜位に研磨されているが、刃先端部分だけ横位に研磨されている。

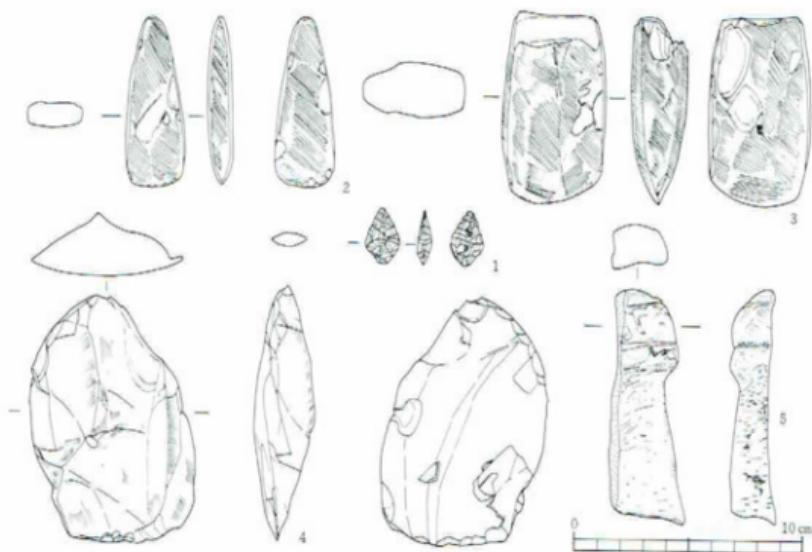
不定形石器 1点出土している。

平面形は橢円状をしている。石核の片面加工によって刃部にし、背面は自然面である。加工も局部的で粗い。

石棒 1点出土している。

頭部の破片であり節理面に沿って細長く割れ、幅、断面がわからない。頭部はふくらみをもち2本の沈線がつけられている。器面を敲打し、それを切って研磨の際の擦痕が斜位にみとめられる。

このほか、石劍、石鎌の未製品も数点出土している。



第21図 B地区出土石製品

B地区出土石製品

番号	種別	出土層位	長	幅	厚	石材
1	石鎌	III - 3	2.4	1.5	0.6	チャート
2	磨製石斧	IV - 2	(8.5)	4.6	2.1	粘板岩
3	"	IV - 2	7.6	2.6	1.1	"
4	不定形石器	IV - 2	10.9	7.3	2.8	"
5	石棒	I - 4	10.4	3.2	2.0	頁岩

(5) 骨角・貝製品 (第22図)

この地区からは、釣針、燕尾形離頭鋸木製品、弾形角製品、骨箇、骨製垂飾品などが出土しているが少量である。貝製品も1点だけ出土しているので、あわせて述べる。7点のうち5点が第2貝層に集中し出土している。

釣針 3点出土している。

いずれも鹿角製である。1は内鍔の破片であり、全体の形状は明らかでないが大型の釣針に属するものと思われる。2、3は釣針の末製品である。3は角の分岐部を加工している。

燕尾型離頭鋸 1点出土している。

鹿角製である。形はできているが、引綱を止めるための孔や柄を装備する部分がまだつくれていない。長さ7.6cmを計測し、全体的に細身である。

弾形角製品 1点出土している。

浮袋の口と呼ばれているものである。鹿角製で全長3.6cmを計測し器体表面に溝がつけられている。内部は髓質部に孔をあけ貫通させている。孔は上方が若干ひろがっている。

骨箇 1点出土している。

シカの中手骨を割ったもので、A地区出土の骨箇と比べると細身で薄く、先端も脱くなっている。全長8.0cm、幅1.6cmを計測する。

骨製垂飾品 1点出土している。

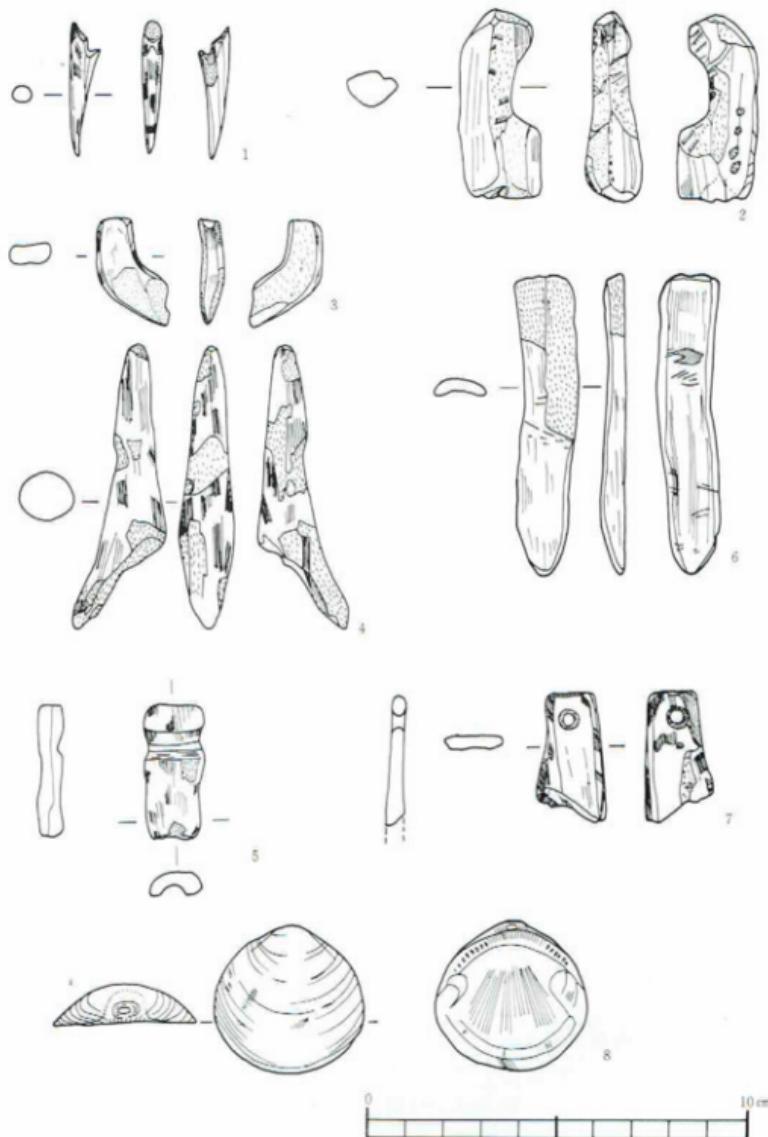
シカの下頸筋骨の薄い所を素材としている。基部の破片で、下方にいくにしたがって広くなっている。基部付近に孔が両面よりあけられている。

貝製品 1点だけ出土している。

エゾタマキガイ製のもので、殻長3.9cm、殻径3.9cmほぼ円形で殻頂部に孔をあけている。装身具なのか、道具として使用したものか不明であるが内部腹縁に擦痕がみとめられる。第1貝層から出土しているが、貝層中からはエゾタマキガイの出土は多くない。

B地区出土骨角・貝製品

番号	種別	出土層位	最大長	素材
1	釣針	I - 1	(3.6)	鹿角
2	"	II - 3	5.0	"
3	"	I - 4	(2.8)	"
4	燕尾形離頭鋸	I - 4	7.6	"
5	弾形角製品	I - 4	3.6	"
6	骨箇	I - 4	8.0	シカの中手骨
7	骨製垂飾品	I - 4	(3.5)	シカの下頸筋骨右側
8	貝製品	II - 3	3.9	エゾタマキガイ



第22図 B地区出土骨角・貝製品

(6) 自然遺物

この地区からは、カキ（第3層）・アサリ（第4層）・アズマニシキ（第5層）を主体とした貝層があり、各層より多くの自然遺物が出土している。

第3層は貝類ではマガキが主体で、次にアサリが多く、レイシ・イボニシ・アズマニシキ・オニアサリ・スガイ・イガイ・カリガネイガイ・ユキノカサ科・オオヘビガイなどがみられる。魚類ではマグロ科・スズキ・タイ類・サバ・イワシ・アイナメ・カサゴなど、またカメ・ウニなども少量出土している。陸棲動物はイノシシ・シカが圧倒的に多い。

第5層にはイノシシが圧倒的に多く（図版12）、ニホンジカもわずかに含まれる程度である。第6層では、タイ類、ニホンジカ、イノシシの骨がそれぞれ一部位づつ出土している。

これらの貝層のうち、アサリ（第4層）とアズマニシキ（第5層）を主体とする貝層から採集された一定量の土壌について分析した。各々平箱一杯分の量で乾燥状態で第4層は16.5kg、第5層は18.8kgあった。これらを水洗して10・4・2mmのフリルにかけて自然遺物を選別した。以下、その概要を記す。

貝の種類と組成 4mm以上のフリルに残った海産貝の組成を表にした。いずれも内湾の岩礁や砂泥底に生息する貝であるが、両層には同様な環境に生息するマガキが少ないのが奇異である。両層がマガキの採集適期（寒い季節）以外に形成された可能性がある。

貝の種類は、第4層ではアサリが主体で、次にクボガイ・ムラサキインコガイが多く、アズマニシキ・イガイ・レイシ・イボニシ・タマキビ・スガイ・チヂミボラ・コシダカガンガラ・ユキノカサ科・オオヨウラク・オオヘビガイなどが、第5層ではアズマニシキが主体で、次にアサリが多く、イガイ・レイシ・タマキビ・スガイ・ユキノカサ科・オオヘビガイなどが含まれる。（表参照）

魚類は、両層からほぼ同様の種類が検出された。メバルなどのカサゴ科が5～3匹ほど含まれ、頭部の各部位と脊椎骨が出土している。ついでマダイ・アイナメ科の順に多く、前者には体長50cmほどに達する大型のものもみられる。このほかエイ類・マアナゴ・マグロ類・スズキが脊椎骨1個程度含まれ、少量捕獲されていたことがわかる。また第4層からはカツオの脊椎骨が2個出土している。さらに同層にはイワシ類の脊椎骨が4・2mmのメッシュに300個以上検出され、体長20cmほどのマサバの脊椎骨も10数点含まれ、きわだった特色をもつ。これらの魚類は夏から秋にかけて内湾に群をなして回遊していくもので季節性を表わしている。

この他両層にムラサキウニの棘、殻板が少量づつ、第4層からカニのハサミが、また同層からチシマフジツボ、第5層からシロスジフジツボが多量に出土している。

陸上動物では、第4層にはイノシシの臼歯片、ノウサギの上腕、鎖骨、ネズミ科の不顎・大腿骨、マムシ以外のヘビ科の脊椎骨3点、第5層からニホンジカの未節骨が1点出土している。

なお両層の資料中には鳥骨が含まれていない。本貝塚のある大島は、冬期を中心に多量な渡り鳥のルートにあたるが、その時期に居住していなかった可能性も指摘される。

貝種	層数		4層		5層		貝種	層数		4層		5層	
	左	右	左	右	左	右		左	右	左	右	左	右
アズマニシキ	1	3	94	154	チヂミボラ		3						
アサリ	105	109	29	25	コシダカガンガラ		4						
イガイ	3	2	1	4	クボガイ		49						
イガイ幼貝	1	2			ユキノカサ科の一種		8						
ムラサキイシコガイ幼貝	32	31			オオウヨウラク幼貝		3						
ムラサキイシコガイ	2	0			オオヘビガイ		2						
レイイシ	4) 4) 1		風化貝		15						
イボニシ	9				その他		6						
タマキビ	5		1(幼貝)		合計		267						
スガイ	4		3										

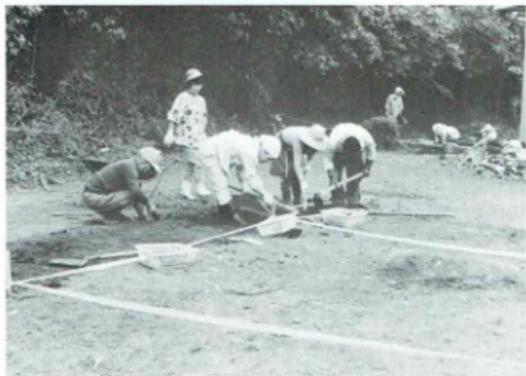
VI まとめ

1. 胸形遺跡は、氣仙沼湾に浮かぶ大島の南西部丘陵西斜面に立地している。
 2. 住居址などの遺構は確認されなかったが、マガキ・アサリ・アズマニシキを主体とする貝層が確認された。
 3. 繩文土器は、A・B両地区とも多量に出土しているが、その特徴より繩文時代後期中葉から晩期初頭のものである。
 4. 土製品は、環状耳飾が多く、土偶・円板状土製品・耳栓状土製品・垂飾品などが出土している。
 5. 石器は、石鎌・石匙・磨製石斧・石籠・石棒などが出土している。
 6. 骨角製品は、骨鏃が多く、アスファルトが付着した根ばさみや燕尾型離頭鉤・釣針・尖頭器・彎形角製品・弯曲刺具など出土している。
 7. 貝は、内湾の岩礁や砂泥底に生息するものがほとんどである。また第4・5層では寒い季節に採取される貝がほとんど含まれていない。
 8. 魚骨はイワシ・マサバ・マダイ・スズキなど夏から秋にかけて内湾を回遊しているもの、またマグロ・エイ類・カツオなどの大型の魚骨も含まれている。
- 獸骨はイノシシ・ニホンジカが多く、またオットセイ・ウミガメなども出土しているが、鳥骨がほとんど含まれていない。



図版1 航空写真

図版2の1
A地区作業風景



図版2の2
A地区出土土器



図版2の3
A地区近影



図版3の1
B地区作業風景

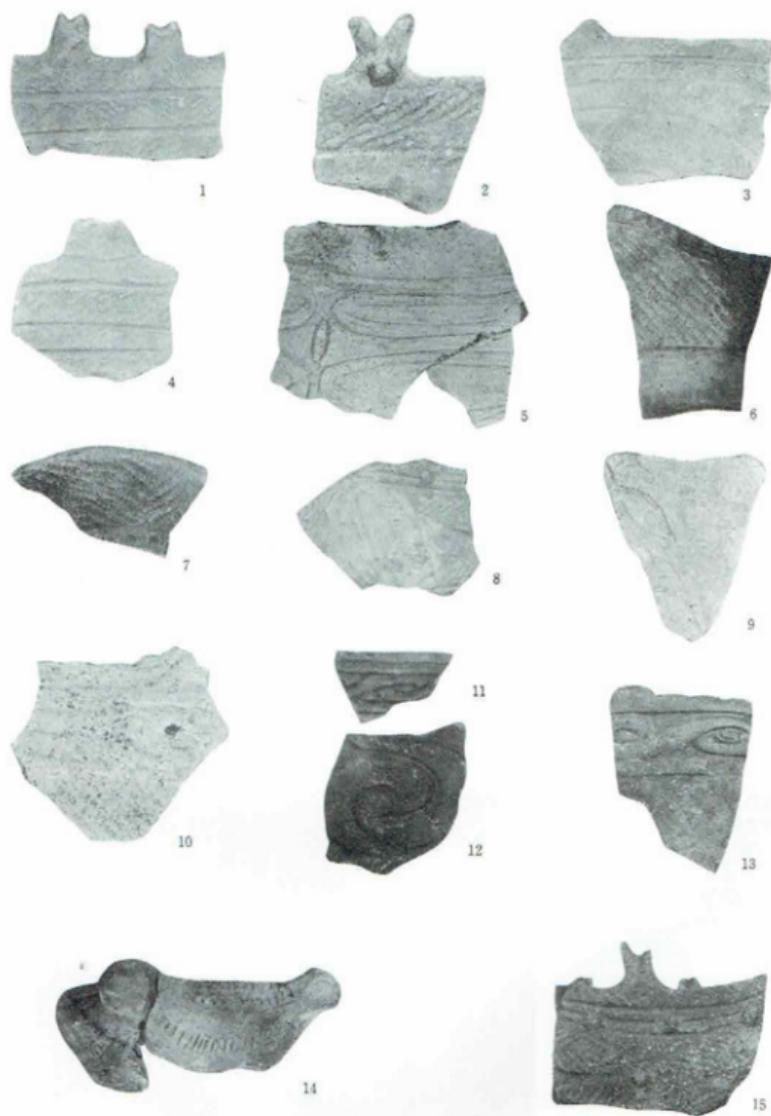


図版3の2
B地区断面(南北)

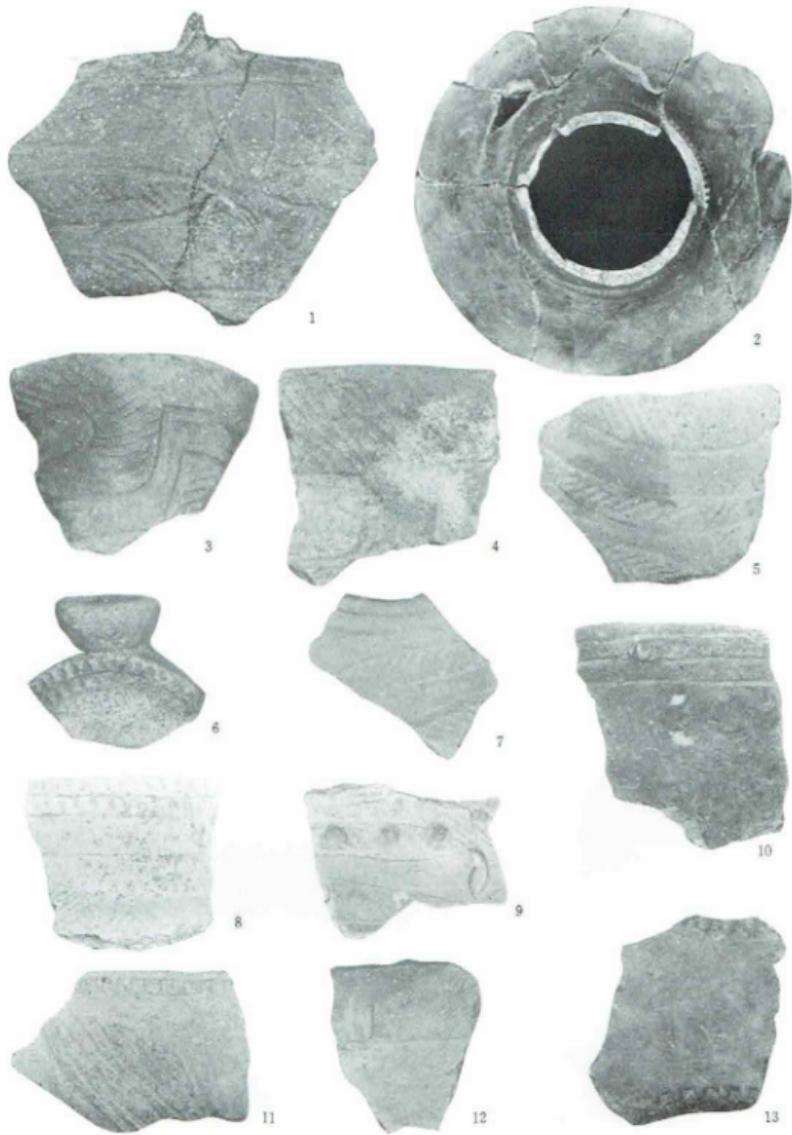


図版3の3
B地区出土自然遺物

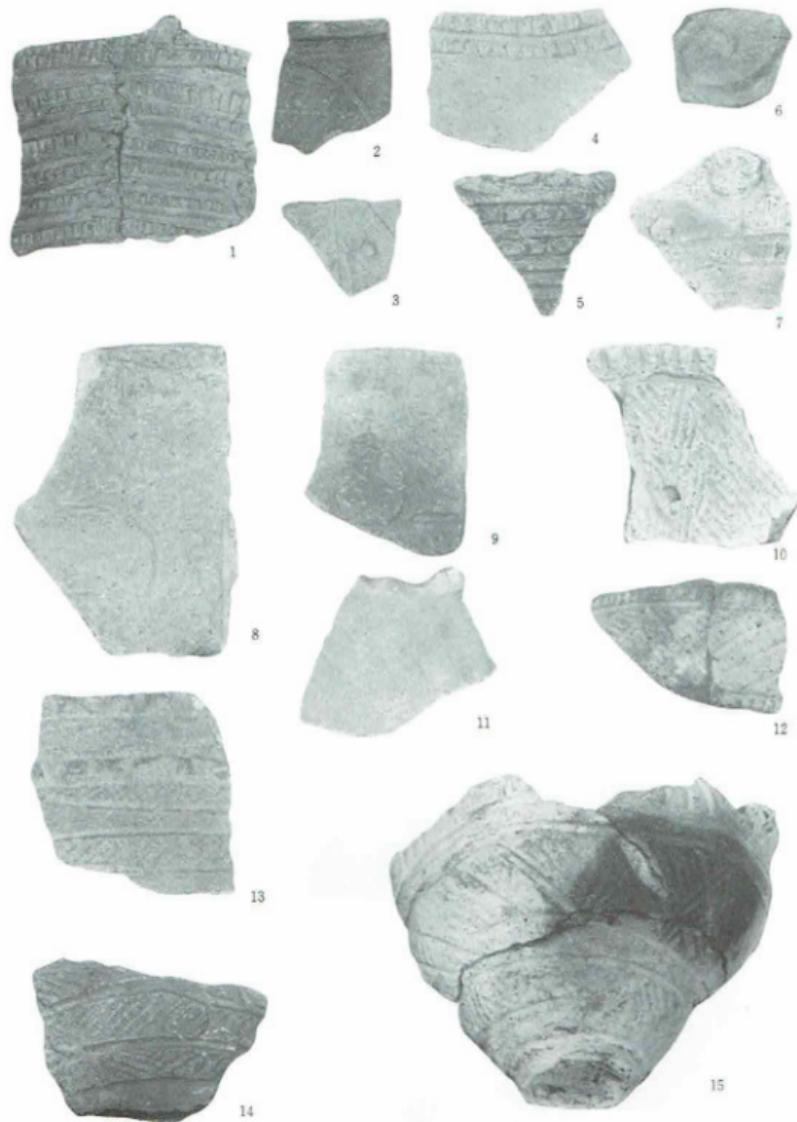




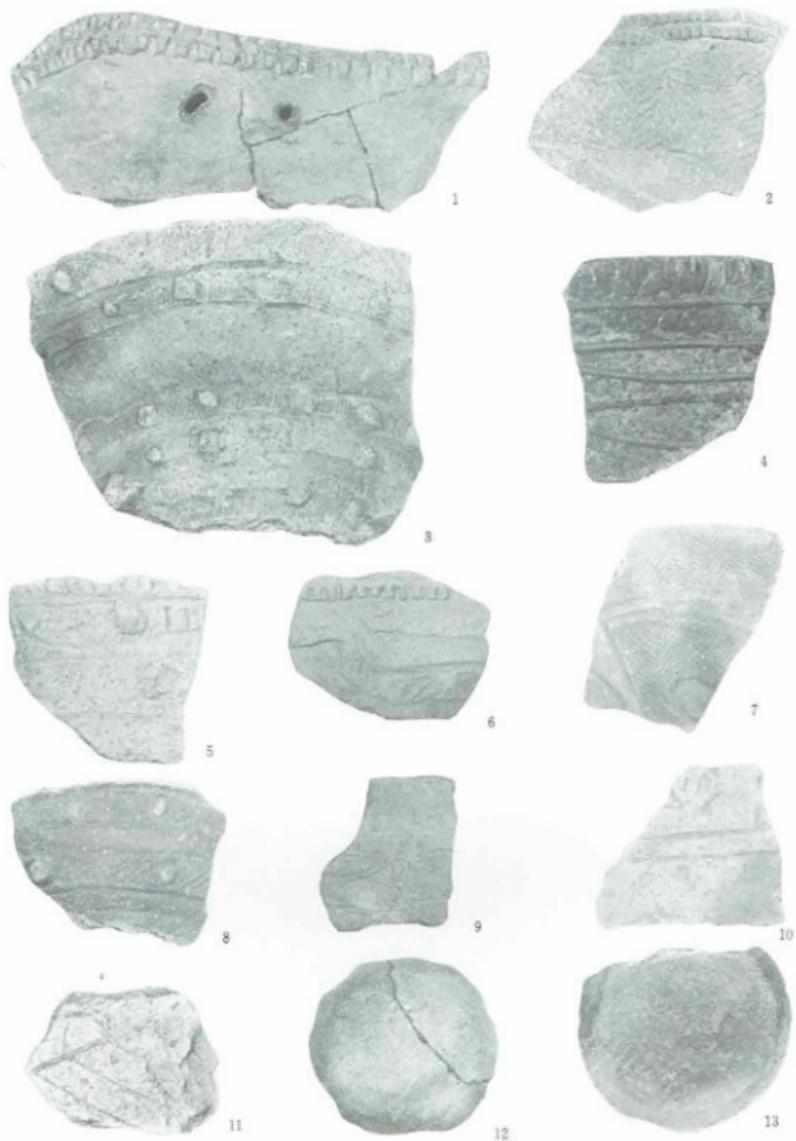
図版4 A地区出土土器(1~13・第1層／14~15・第2層)



图版5 A地区出土土器(第2层)



图版 6 B地区出土土器(1~7·第1·2层／8~15·第3层)



图版7 B地区出土土器(第4层)



图版8 A地区出土注口土器



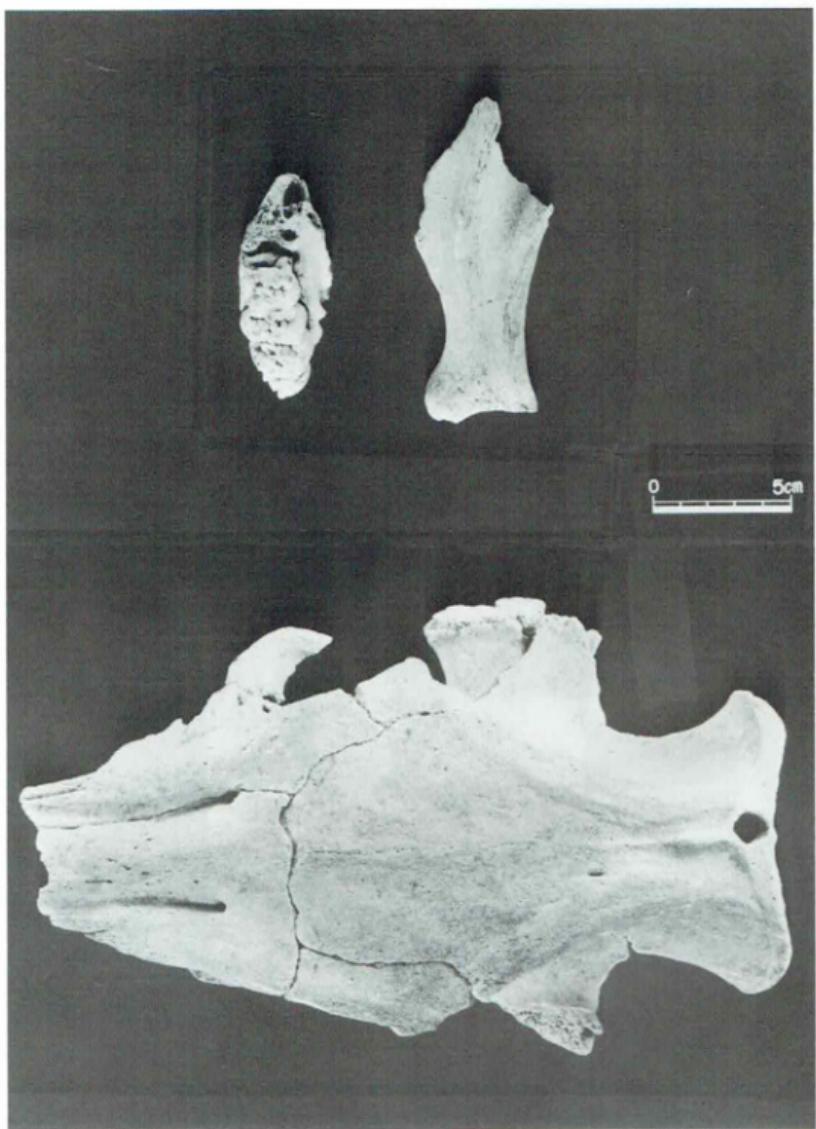
图版9 A地区出土骨角制品



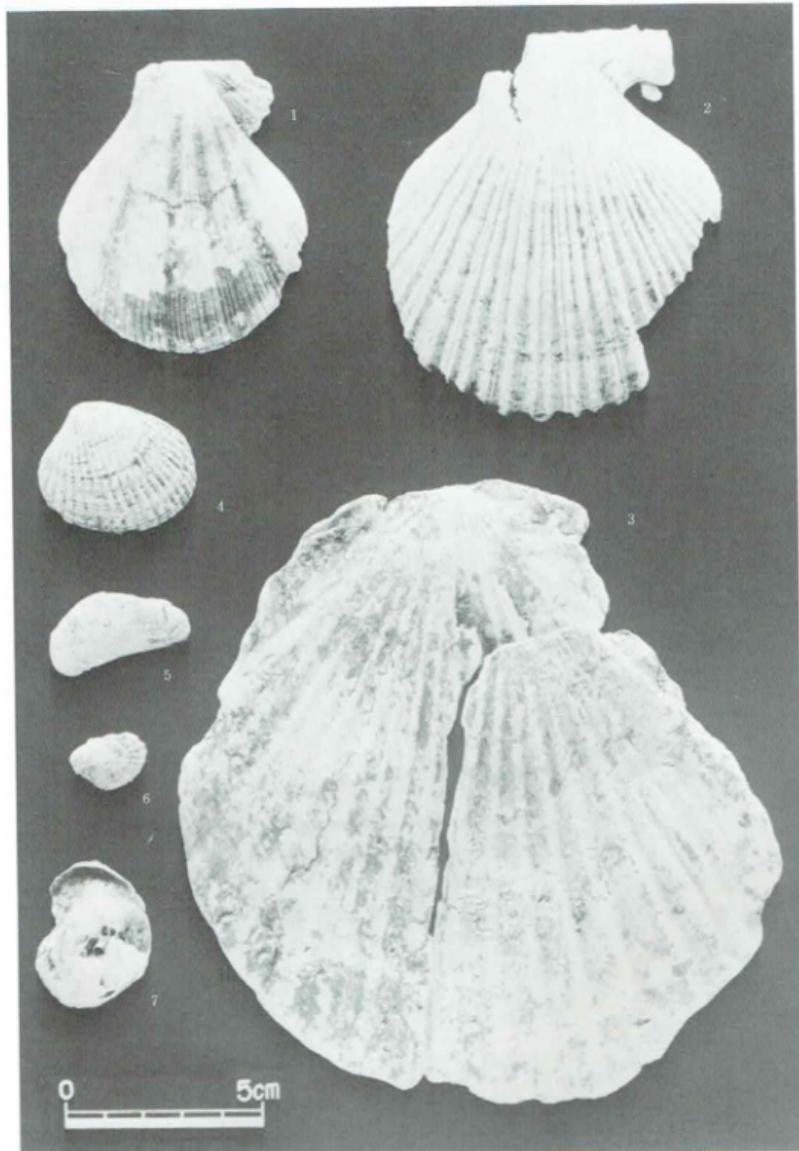
图版10 B地区出土骨角·贝制品



図版11 自然遺物 1.クジラ 2.マダイ 3.4.ウミガメ 5.6.マグロ 7.イノシシ 8.オットセイ 9.シカ



図版12 B地区出土のイノシシ



図版13 B地区出土の貝類
1.エゾキンチャクガイ 2.アズマニシキ 3.ホタテガイ 4.オニアサリ 5.カリガネ
木工ガイ 6.ユホノカサガイ 7.オオヘビガイ

宮城県気仙沼市文化財調査報告第5集
一般国道大島線改良工事に伴う
刊行物

宮城県気仙沼市文化財調査報告第5集

一般国道大島線改良工事に伴う

駒形遺跡発掘調査報告

昭和61年3月30日印刷

昭和61年3月31日発行

発行 気仙沼市教育委員会

〒988 気仙沼市八日町1の1の1

TEL (0226) 22-6600

印刷 三陸印刷(株)

〒988 気仙沼市南が丘1の2の3

TEL (0226) 22-0319㈹
